

# 青山、志賀家墓所の空想と夢想（三二）

——『城の崎にて』と『佐々木の場合』——（三二）

町田 榮

## 要旨

本稿は、直接には、

青山、志賀家墓所の空想と夢想（三二）——『城の崎にて』と『佐々木の場合』（二）——『跡見学園女子大学紀要』第三十三号（二〇〇〇年三月十五日発行）

青山、志賀家墓所の空想と夢想（三三）——『城の崎にて』と『佐々木の場合』（二二）——『跡見学園女子大学国文学科報』第二十八号（平成十二年三月十八日発行）に掲載

に続く。なお、一連の志賀文学の考察に、

青山、志賀家墓所の空想と夢想（二一）——墓参史の意味——『跡見学園女子大学紀要』第三十二号（一九九九年三月十五日発行）に掲載

青山、志賀家墓所の空想と夢想（二二）——慧子の誕生、死、その埋葬——『跡見学園女子大学国文学科報』第二十七号（平成十一年三月十八日発行）に掲載  
がある。

(四章の続き)

城崎において情態は暗転し、死の形象ばかりにとらわれる。はじめ、単なる寓目であったかも知れない。看過できなくなる。日記に、蜂と鼠(目撃した日時不明)とが同日付に併記され、次ページにいきなりが連記されている(大正二・一〇・三〇、三一付)ゆえんだ。示唆的である。再三の遭遇を重ねて、いずれも内心を映した自己と悟ろう。やがて尾道での決定的な、線路内の「白い鳩」に出合う。電車禍以来の経緯を負っている、と了解されよう。「自殺」が到着点であり、長期碇泊の地となる。「大正五年三月十八日」の日付をもつ、「自殺しかねない」はずでに示した。

いまさらながらに、この三、四ヶ月来の陰陽、躁鬱の落差が、転倒が、短い過程が顧みられよう。抗えず、ただ任せるだけであった。連日「十枚書く」(大正二・一〇・一九〜三付)の平面にきたす急下降に、翌二十四日付の「風邪にて終日就床、/夜一寸玉突へ行く/入浴せず、/仕事もせず」に何らの理由も、外因もない。見あたらぬ。翻弄された自身が、その原因を抱えているらしい。二ヶ月余り続いて、「十枚書く」に駆り立てた積極的な、果敢な情動が、ここに、早くもといふべきか、ようやくといふべきか、尽きたのである。長編執筆は途絶する。

本来そなわっていて、より有力な、表面化の機会を待っていた動因が始動したのだろう。真の素顔を發揮する。やはり、例の大正二年八月十七日と私推する夢見、その別面、深部が露呈して、志賀の死をのみ意識される現状に過ぎなかったのだ。反対の二方向に作用する蒔種の、交互の発芽といってもよい。思えば、とうてい重傷とはいえぬ電車接触の外傷

を、直後にして、生死のせめぎ合った体験者、死地をしのいだ勝者、生還者に変容させた心因であった。入院中の記述に「仕合せ」、「快活」、「愉快」、「い、気持」などという。長い入院者に特有の湿潤な脱力感、閉塞感、拘禁感、無気力、アンニュイがない。奇異だ。なみはずれた高揚感を示す。安静は保てず、事故のショックは増幅している。夢の両面が心理的な交替劇、逆転劇を演出したとするよりない。

奇跡的に軽傷ですんだゆえ、怪我そのものの治癒は早い。十三日もの入院期間は、東京病院の払った慎重な看護を意味しよう。なかなか退院許可はおりぬ。過剰な診療ではなかった。静養どころか、志賀の異常なたかぶり、心気の亢進、それは見舞いに訪れた里見、武者小路も目のあたりになっている、――を注視して経過観察に、興奮の鎮静に、多くの日数をあてたのである。杞憂に終らなかつた。現に、反動が来ている。

この遠来の城崎訪問者は、盛んな創作欲をもって乗り込み、冷却して空しく、尾道寓居へ去る。長編の執筆と挫折が、その一証左である。滞在中に、いわば、生から死への移行を体現している。なるほど、城崎の地は墓地であった。

そもそも、城崎行の理由が知れぬ。志賀は語らぬ。秘事であるはずはない。筋道立てて説明できぬ機微が働いたのだろう。

目的の尾道寓居入り<sup>(1)</sup>に際して、にわかに、大きく迂回する。当時の日記に、「後養生」の意向も必要も窺われない。『鉄道旅行案内』(大正二・九・一発兌 駈々堂 一九八号)に照らして、記述をたどってみる。十月十四日の夜、「八時」の急行神戸行(翌朝十一時着)で新橋を発ち、里見が

国府津で「十一時頃」（午後九時五二分）に乗車して、ともに翌朝「十時頃」（十時四分）大阪に着く。友人の九里四郎（大阪市南区周防町四に居住）に迎えられて、三日間遊び明かし、歓を尽くす。孤独と執筆の苦行にそなえた遊び溜めか。現場の十七日付に、「京都行の計畫をしてゐたが、イヤになり、又九里（注、前夜ひとり別れて帰宅）を呼ぶ」という。夜、別宴として「船料理屋へ行く、而して、七時半の凜車で二人に送られて、福知山へ出発」とある。「イヤになり」、「而して」が城崎入りの機密に触れているようだ。客観的にはわからない。京都との対比とも推察されるが比較、選択といった思量は働いていない。尾道行も念頭に浮かばぬ。「七時半」発の福知山經由の汽車は大阪、京都駅にない。大阪発午後七時二十五分は篠山止まり（午後十時四八分着）である。「七時半」は誤記か。大阪午後六時三十分発の新舞鶴行（午後十一時五二分着）が日記内容に整合する。福知山（午後十時二八分着）は城崎方面との分岐点で、眠っていて危うく「乗り越す」ところであった。「十時過ぎ淋しい町」を人力車で通り、旅館に一泊。福知山行は、即夜に城崎近く、行けるところまで行こうと思ひ立った挙であった。内心の呼び声に応じた、啐啄の直行なのか。だから、翌十八日は「起きぬけに出発 七時半」で、城崎（午前十時三分着）に入る。滞在は三週間に及び、出立した後にも、近く再三訪れる。有縁の地であった。ならば、城崎行きの理由を語ることは不可能だ。青山墓参に親しんだ者にとって、そこがゆかしくも、城崎と称する地であるからだろう。後年の「城の崎」、奥つ城参入の端緒を開く。「城の崎」は、城崎の同音異義を弄した洒落ではない。

『兒を盗む話』中に「白い鳩」を描いた一節は、類例の芥川龍之介『鶴沼雜記』中の一断章と対照できよう。全十一章の末尾に「二五・七・二〇」の日付がある。自殺の一年前にあたる。決意は、大正十五年四月十五日に小穴隆一に告げていたという（小穴『二つの絵——芥川龍之介自殺の真相——』、昭七・一二八・一『中央公論』）。積年の多病に加え、至難な事情に困窮されて、精神も肉体も困憊、衰弱をきわめている。

僕は路ばたの砂の中に雨蛙が一匹もがいてゐるのを見つけた。その時あいつは自動車 came たら、どうするつもりだらうと考へた。しかしそこは自動車などはひる筈のない小みちだった。しかし僕は不安になり、路ばたに茂った草の中へ杖の先で、雨蛙をはね飛ばした。章名も立てぬ断章の全文である。散歩の途中で志賀、芥川は「白い鳩」、「雨蛙」に出会う。思いがけぬ遭遇というよりも、ふたりの内心がそれぞれを選び求めたものだ。対象を入れ換え、また、他と差し替えることもできぬ。一瞥も与えるまい。ふたりは各自の邂逅に意外感はなく、必然性を信じるだろう。しばらく、釘づけになってしまい、交渉を持つ。危殆に瀕した自身とその象徴との親和は、ある慰めをもたらす。わずかに鬱気を晴らす。

芥川は、何んと優しい親愛感を注ぐことか。「雨蛙」は木の葉から落ちて、浜砂ぼこりにまみれ、「砂の中」にもだえ苦しんでいる。自画像だ。往年、機知をふるって「青蛙おのれもペンキぬりたてか 東京我鬼」（大八・三・一『ホトトギス』第三卷第六号、高浜虚子選「雜詠」のページ）と詠み、この「句得意のだがどうでせう」（大八・二・八付薄田淳介宛書

簡)とも書き送る。粘液に濡れ、精気に満ちた光沢を放つ体表に刮目した。「雨蛙」の皮膚は乾き、汚れ、生色はない。芥川自身も同様に活路のない窮状につまんで、生命力も枯れている。

一編の主眼は、うち消しがたい「自動車が来たら」にある。仮定ではなかった。払拭できないのは、かねて、芥川がその予感を持っていたからに相違ない。「どうするつもり」も、何もあるまい。小蛙には「杖の先」の一触で足りよう。自身も、どんな些細な新事態の出来にも堪えられない。しかも、それを忌避してはいないようだ。滅ぼしに来るものを待つ。目前の蛙に寄せるのは、せめて、「草の中」に隠して葬る優情である。文末、「はね飛ばした」の語調には、あえてした徒事の口吻がこもる。すでに死となじみ、戯れ、甘美な交歓すら漂う。

なるほど、一見、志賀の精神は頑健であるようだ。「自殺はしないぞ」に、強靱な意志力の発動を認めるからである。実情は違ふ。心中につぶやく声は低く、弱々しい。非力な自衛を語るに、肩肘を張らざるをえない。

この主人公に、「白い鳩」は追い立てられぬ。心身ともに吸着され、硬直して「ボンヤリ」してしまう。放心没入した脳裏には「汽車が来ると、あぶないな」のほかはない。寸分の狂いもない自己の、死の象徴であった。自他の弁別を奪われている。ようやく、「鳩があぶない事はない」と思い直すと、連動して、「踏切り」を越えることができる。混迷は解けていない。「白い鳩」を分離して、自己を回復したわけではない。以降、長く苦しい情態にさらされるようになる。

「町の方へ歩いて行」きながら、「自殺」の念がこみあげる。一挙に高次の、確実な衝迫にかられたらしい。もとより即応して、防御態勢をとってはみる。さきの蜂・鼠・いもりは現在も継続中の精神沈降がもたらした、最初期の形象たちであった。もしかすると、親しみ、和むところもあったらう。夢の別面の所産である。「白い鳩」もその一環に違いない。が、直接に死の実行を唆す遭遇だ。「自殺」を指している。しかも、表現上、遡って電車禍に起因する点もうち明ける。ここで入院中の、生死の夢見と電車禍とが結ばれ、融合する。数ヶ月来の過激な情緒不安に、その出立点は定まったのである。客観的にいえば、この夢の形成を考えると、時宜にかなって、電車禍に連携できるはずはない。別種のものである。後述する。

「踏切り」前の鳩目撃と、「自殺はしないぞ」とは軌を一にしない。時間、場所もずらして描かれる。「白い鳩」の「自殺」は、後ろから追いついて、全身に覆いかぶさったのである。離れない。電車禍と不可分な夢、夢に鎧われた電車禍ショックに始まった、心神の盛衰交代、死の形象たちとの遭遇、これらを累積し、集約して強度を増した「白い鳩」の、「自殺」使嫉である。今後、死の形象に会う、会わぬにかかわりなく、日常のことごとくに触れて、「自殺」と対峙しなければならぬ。意識的にどんなに阻んでも、志賀の内心は、無意識はおのずから「自殺」を紡ぎ出してしまう。大正五年三月十八日付の手記内容が例証である。連敗に疲弊しきった「神経衰弱」(前掲、『兒を盗む話』初出)者の鬱症状を呈している。

直前に短く、激しい心神の活動期、狂躁期を送った。日記の記述によつて、大正二年八月十七日より十月二十三日までの期間を仮設できる。夢の一面、いわば浅く、薄い表層の情動放出、その蕩尽であった。当期、唯一の制作に反映している。従弟○○○○自殺事件を扱った「徒弟の死」（大ニ・八・七付）は退院後の「支那人の殺人」（九・一付）で構想を逆転し、完稿『范の犯罪』（九・二四付、翌十月号『白樺』に発表）で殺人者を支持する。中間に電車禍、夢見を置いた改題、改稿の推移は労作、推敲を証するより激情の流露を裏づける。その延長線上に、無謀な尾道寓居行、その途次の城崎滞在、当初の「十枚書く」も載っている。

もともと、あの夢の深い基層は死の希求にあった。沈降は進んで、「白い鳩」を契機に底をつく。志賀にはその自覚があった。常時、油断なく構えて、「自殺はしないぞ」と唱えていなければならない。自己深奥との悪戦苦闘が始まる。芥川の「自殺」は外に在る。

かくて、「いのち」と題する制作にとりかかる。電車禍を起点として、尾道の「白い鳩」にいたる経路の検証となろう。沈滞した情動が、ついに「自殺」の臨界を指したと自得されたゆえにほかならぬ。起死回生をはかってみたのだ。執筆時は、前掲の冒頭部によつて大正三（一九一四）年内、『兒を盗む話』の「大正三年正月」以降である。やや狭めて、城崎第三回入湯後とすることもできよう。作中、「或る温泉」が保養、休養の地として語られているからだ。ならば、当三年八月以降となる。確証はないが、その滞在中の執筆とするのも可能である。

すなわち、城崎再訪は「京都 大阪 有馬 城崎 鳥取 東郷湖等を

まわつて」松江入り（大ニ・五・二七付和辻哲郎宛書簡六五）した折りである。列記した地名群に埋没している。通過点、経由地にすぎない。三訪目は、同八月末に松江寓居を引き払って、「去年した怪我の後用心に城崎といふ温泉に十日程めてそこから京都に暫く住むつもりです」（前掲）。この「十日間」の滞在中に、末尾に「（城崎にて）九月二日」と明記した未定稿「女に関して」を書く。なかに、次のようにいう。

一ト月して（注、伯耆の大山をおりて松江の借家に戻っていた）自分は城ノ崎の温泉へ来た。自分は背中に打身の傷がある。それが冬になつて痛まないやうに此所で十日間我慢した。温泉場の空気と特に日に三度の入浴とは気分も肉体も全くゆるまして了つた。自分は最初からそれを予期してゐたから、別にイラ／＼したり不安になつたりはしなかつた。

おのずと、前年の晩秋、初めて訪れた城崎、その弛緩した後半期と比べられる。「イラ／＼したり不安になつたり」していたのだ。三訪はあらかじめ、不活発に陥る心身をいたわって防衛的である。「いのち」にも、「其所はかういふ打身などにはい、温泉だつた」といい、「精出して入浴した。それから読む事、散歩をする事をした」とある。双方吻合する。城崎は勢こみ、破綻した初訪時と、三訪目とは異なる。『城の崎にて』の「後養生」の地は、三訪時の死のかけを引いている。

抽象的、概念的な標題の「いのち」とは、仮題にせよ、志賀作品において異色である。いかに、その復活が切実なテーマであり、モチーフであったか。生命の消長、干満を夢現ふたつながらに体験して、いま、銷

沈しているからだ。あの夢こそ命題すれば、「いのち」がふさわしい。その想起なくして、この制作も命題もかなわぬ。しかし、未定稿にとどまる。依然、「自殺」が滞留して、再起できず、「いのち」本来の主題を支えられなかったからである。同時に、作中の「城の崎」の表記も「或る温泉」に改められる。臙化ではない。志賀が奥つ城に生から死への地であるよりも、死から再生を遂げる地と観じていることは確かだ。テーマは『城の崎にて』に持ち込まれて行くだろう。標題に据えたのは、生命の復活を意味する。

例の夢は記録されなかったらしい。温存とはいいいえ、それがもたらした生命の退潮期にあたって、禁忌されたのであろう。

「いのち」は、「昨年」の八月十五日の夜」に遭った電車禍から語り始める。全編の基点である。城崎入湯を引き出し、「いもり」で中断してしまう。「昨年」、つまり執筆時現在にあって、一年に足りぬ心神衰退の来由を見直し、たどってみようとする。といっても、例の高潮期は小さい捨象される。急務ではない。電車禍と死の形象とが一致し、しかも「自殺はしないぞ」にまで落ち入るのは、短い尾道独居中(大二・一一・八〜二五)の「白い鳩」目撃であった。先行する城崎初訪期(同一〇・一八〜二一・七)ではない。その日記上に蜂・鼠・いもりの死目撃は電車禍と関連していない。自得がない。しかし、「白い鳩」で定着した危険な情動は城崎再訪、三訪時、現在に持続している。「いのち」の段階で、電車禍を発端とする生死省察に再編成されたことは明らかだ。完全な作為ともいえまいが、仕組んだ仮構の大枠は『城の崎にて』に踏襲さ

れる。

本文は便宜的に三分できよう。かりに上・中・下と呼ぶ。〈上〉には同行、介護者の里見も「一人の友」、「友」の形で登場する。芝浦沖の台場三島で催された納涼祭見物、ふたりは渡島していない、——に出かけた帰りの遭難である。命拾い、入院、治療、温泉行などを語る。「自分の怪我は此の災難としては不思議な程に最小限に済んだ」といって、種々、最悪の場合や条件を想定してみる。完成稿には、まったく採用しない。めぐり会った現実が唯一、絶対視されるのだ。理由も、予測も、仮定も、回避も、免除もありえず、怪我の軽重も問われぬ。電車禍は「不注意」の惹起したのではなく、怪我の「最小限」にすんだ「幸運を感謝」もしない。一回性の生き物にとって、すべて、かけがえのない邂逅であろう。

〈中〉では、電車による遭難事故を素材にした二制作を挙げて、自身の奇禍をそれぞれの方面から照らし出す。奇跡的な、九死に一生をえた理由を求めたのである。実作『出来事』(大二・八・一五稿了 八・二二、二三清書 大二・九『白樺』)であり、もうひとつは新聞記事に拠った、制作構想である。米寿を祝ったばかりの老人が線路横断中に、緊急停車した市電の救助網に触れて転倒し、病院に搬送されたが死んだという椿事である。事実、退院後の、各紙いづれも大正二年九月五日付の『報知新聞』夕刊四面「電車八十八の老翁を轢殺す」、『都新聞』三面「八十八老轢殺さる」、『二六新報』夕刊二面「老人電車に轢き殺さる」、『萬朝報』三面「電車に轢かれる」、『やまと新聞』四面「駒形で電車に轢殺さる」

の見出しで報じている。志賀の接した新聞はわからない。

『出来事』は、自身の乗った市電が子供を轢きそうになり、幸いに助かった喜びを描く。救助網が掬い上げたのである。作品を書き上げた、その夜、当の作者が電車遭難して助かる。偶然の暗合を問題とする。同時に、前々年発表の『正義派』（大元・九『朱欒』）をも連想していよう。救助網の操作が遅れて、幼児を轢き殺してしまった事件を扱う。もちろん、「いのち」中に触れぬ。

自分は自分が子供の助かった事を書いて置いたが故に自分も助かったやうに思はれてならなかつた。

と、双方の符合を解く。口吻に嘆息をもらす。こんな因果関係をあてても、自己救済しただかつたらしい。「いのち」執筆時の傷心述懐である。後年、『創作余談』（昭三・七『改造』）には、端的に「此偶然を面白く感じた」という。懸隔ははなはだしい。これが平常心だ。志賀は偶然性に対して関心が深く、晩年に『盲亀浮木』（昭三八・一『新潮』）がある。『出来事』完稿時の、遭難直後の日記三記述は、右の引用文とはニュアンスが違う。沈痛感がない。暗合というならば、もっと強く、積極的、行動的で切実だ。『正義派』執筆後の遭遇であつたら、どんな惨事を招いたことか。何よりも、新作のただちに翌九月号『白樺』掲載に逸り勇んでいる。入院中の八月二十二、三日は異母妹英子に原稿の「清書」をしてもらう。軽傷の回復は当然に早く、すでに手助けなど要るまい。九月二日付には掲載誌を持参した武者小路を、後日の記載となろうが、八月十五日付に完稿直後、遭難直前に『出来事』を披読した里見を記録す

る。三人は暗合に立ち会った証人である。制作と命拾いと幸運な偶然の一致は固く信じられ、喜び、興奮は溢れて三記述にとどめる。死地からの生還者、勇者の守護神『出来事』だからである。暗合は快哉感を伴なっていよう。しかし、彼我いずれも尋常ではない。平静を欠く。

制作構想の方は日記に記載なく、また着手したかも疑わしい。新聞記事そのものが閑却、忌避されよう。「いのち」執筆時の心境になつて想起され、記述したものに違いない。報道の時点が、激烈な『范の犯罪』形成の渦中にあるからだ。「徒弟の死」は九月一日付の「支那人の殺人」に構想を逆転、変貌をとげている。いったん、「仁兵衛の初恋」（九・四、五付）執筆にされるが、遂行力は宿らぬ。「いのち」に語る作品構想は皮肉な、不慮の死をテーマとするらしい。老人の蒙った奇禍を、小さな「災難」と最大に不幸な「結果」とに分けて、自身の直面した災厄に照合する。いかにも理に落ちて、生死の省察にそむく。「自分の災難の比較にならぬ程大きいのに、しかも受けた結果がその最小限で済んだ」と、ますます理に走ってしまう。「何か生命に対する執着の力といふやうなもの」の存在、作用を抽出してはみる。が、ここまでで、放置される。いっこうに具象化できない。

〈下〉の部分は、日記や『城の崎にて』に重なる。「蜂」の生死相を描き、「散歩」の囁目を語る。谷川に沿う山道を登り、「青白い薄暮と冷々とした山の気」に触れ、「桑の葉」の微動をながめ、「いもり」にいたる。「鼠」と「家鴨」は登場しない。「流れの潭をなす所に山魚の群がゐた。（中略）水底には大きな水蟹がうづくまつてゐた」を改修して復

活、採用するのは作品集『夜の光』に初収録した『城の崎にて』以降である。『白樺』初出には描かれていない。

およそ、その叙述は平板で、羅列的である。『大津順吉』と作品集『留女』に揮った、彫刻的な技量は見出せぬ。低調だ。あの迫真、精緻、簡潔、直截、圧縮、削除、核心、飛躍といった描写力も、骨太な構造的な生かされていない。武者小路の評言を借りれば、作者が「しつかり書いて」ない（『和解』九章）のである。「いもり」の寸描、放置が未定稿たるゆえんを代弁する。過度な死の表象に堪えられなかったのだろう。

「石を投げたら丁度頭に当たって」殺してしまった（大ニ・一〇・三一付）体験は、電車禍に遭った自身を思い浮かべて執筆できぬ。「いのち」と題して死が描けない。回避した鼠とともに描かれるのは、復調をまたなければならぬ。なるほど、次の一文がある。

自分は自分の出会った危険を憶ふと、身を震はせたが、異ふ心で、死に対して今まで感じなかつた静かな、親しさを感じてゐたのである。

早くも大正三年次にして、死に対する「今まで感じなかつた静かな、親しさ」の訪れをいう。奇異ではない。例の夢の顕現だ。一連の蜂、鼠、いもり、白い鳩目撃の客観的自得である。新来の感情は維持、継続できない。「異ふ心」が並存して、その定着を阻む。双方はたがいに反発し、排斥するものではあるまい。ともに暗転し、弱体化した情動の所産である。この意味で志賀の感情は浮動し、ひらめき、それぞれの姿を現わすときに瀕死の奇禍が想起されて、「身を震はせ」る恐怖を覚え、死を拒

絶する。ときに死への親近感にひたる。安定、統一した心境ではない。遭難直後の緊張、高揚期には寸毫も容れなかった、或るいは、現出しなかった「自分の出会った危険を憶ふ」とは、例えば、次のようなものだろう。

自分は運が悪ければ電車にひかれる所だった。二間半も先きに飛ばされたがそれが矢張り線路から二尺と離れない所だった。尚自分はもう一步進んだ時に飛ばされたら、鉄橋の石垣の上から（下は人間の歩く路だったが）逆様に落ちねばならぬ所だった。自分は石垣の上で突伏してゐた自分をカスカに覚えてゐる。又若し自分の飛ばされ方がもつと斜左に行つたら、其所には先の尖つた柵があつたといふから、一層の怪我をしたに相違なかつた。（以下略）

と、止めどない。前掲、「芝区本芝二丁目二番地先」（大ニ・八・一七付『二六新報』夕刊二面）の遭難を思い浮かべては幸運を語り、今さらに安堵の胸をなでおろす。さまざま大難を仮定してこれを免れ、小難ですんだという。恐怖心をなだめる常套だ。三度繰り返えず、危害が「最小限に済んだ」が上・中部の基調である。下の「或る温泉」入湯中、死に対する「静かな、親しさ」は押し通せない。「蜂」はともかく、「鼠」を忌避し、「桑の葉」の詳述を「別に意味もないさ細」な寓目とし、「いもり」に昏迷しては、乖離するばかりだ。「いのち」は自壊する。危難遭遇と城崎体験との制作は、内省化に針路をとつたが、全編を束ねるものが揺らいでいるからである。

もとより、『城の崎にて』の死生観には、「最小限」も「最大」も、



「済む」もない。測りがたい偶然性に生死をゆだねた「生き物」に好、不運もない。つねに唯一の決定だ。しかも、究極的には死に進み、これを逃れられぬ。そうした「生き物の淋しさ」へ認識を深め、徹底して行くには絶対、確実な死の実感、目撃を獲得するよりない。未定稿「いち」が改題、改稿されて、『城の崎にて』に結実する里程はまだ遠い。

付言すると、右に遭難現場を線路わきの「鉄橋の石垣の上」という。『二六新報』にも「鉄道鉄橋を渡らんとして」とあった。里見『善心悪心』に、「そこは行き道に彼等も潜った三丈ほどある陸橋の天端<sup>てんば</sup>で、佐々（注、志賀を指す）の膝頭から一尺とはない所から下の往来へ石垣の高い絶壁になつてゐた。そのツイ鼻の下を涼みの客がゾロ／＼歩いてゐる」と書いている。たがいに照応しよう。大正二年八月十七日付『中外商業新報』（現『日本経済新聞』の前身）四面の「うきよふる」欄に、

▼跳飛 麻布三河台町志賀直哉は四五人連で芝浦で飲んだ帰り芝橋鉄橋上を通行中電車に跳飛ばされ打撲傷で人事不省

こちらは「電車に跳飛ばされ」を報じる。「鉄橋」、「陸橋」も明記されている。「芝橋鉄橋」は現存する。橋の下は、明治期末まで水路であったが、当時は埋め立てられている。田町駅から浜松町駅に向かって、最初の、車道と両側の歩道とに架けた鉄橋である。橋梁に「芝橋架道橋」と彫ったプレートがうってある。

「独語」と題する、『濠端の住ひ』（大・一四・一『不二』、のちに『濠端の住まひ』と改題）の関連草稿のひとつに次のようにいう。松江にあった、大正三年「六月十九日」付の手記を抜粋してみる。結果的に見れば、招

来する発表作途絶のゆえんを、この時期を送る心構えを述べたものと思われるからである。創意喪失の現状打破などまったく意志しない。焦燥感もない。

自分は意識せず、理想通りのものにならうと思つてゐる、無意識でしてゐる事が理想通りでありたいと考へてゐる、何等、努力もなしに理想通りな事をして、しかも自分ではそれを知らずにゐたいと思つてゐる、（中略）／努力でする事には調和が欠ける。

則天去私への希求かと思まがう。が、悟性ではない。あらゆる「意識」、「努力」を払うことが排される。ただただ無為自然を求める。「理想」に課したのは、個人の無意識を超えて、自他共通し、「調和」する普遍性である。この夢の作家は、無意識から意識へ、夢から現実への垂直な通行を信じる。ユングの普遍的無意識の説にかようだろう。志賀は深い内奥から訪れるメッセージに耳目を凝らし、それに任せる深層心理の体得、体現を望んでいようだ。無意識の個人的なレベルよりも、普遍的な呼び声に即した自己、一致した言動を目指すらしい。

従つて、いっこうに努めず、励まぬ志賀である。漱石依頼の『朝日新聞』寄稿の執筆不能、謝絶がうなずかれる。後年の『曇日』（昭二・一『新潮』、のちに『くもり日』と改題）に勘解由小路康との結婚（大四・二・一〇付届出）のいきさつを小説化するが、新生活に臨む華やかさはない。心機一転はない。人生展開を夢見ない。各地の旅行と仮寓との随時、随意なことか。麻布志賀家からの離籍、独立に、どれほどの目算、実質をそなえているか。「不徹底な関係」に放置しておく。父子不和に抗争は

ない。こじれたままだ。この期、志賀にもっとも生彩はない。内心に、「自殺はしないぞ」を養っているからである。

『城の崎にて』の直後に、『小品五つ』(大六・七『白樺』)の標題を冠した五短編を発表する。個別の続編といえよう。それぞれ、発表誌上で執筆年月日を、最初の収録作品集『白樺の森』(大七・三・二六刊 新潮社、ただし「白樺同人」の合著)では執筆年月日と場所とを付記する。記述と発表とは二、三年隔たる。すなわち、「蜻蛉」(大正三年七月二十三日。松江にて)、「家守」(大正三年七月三十一日。松江にて)、「宿かりの死」(大正三年九月十七日。京都にて)、「嵐の日」(大正四年八月嵐の日。赤城山にて)、「山の木と大鋸」(大正四年八月卅一日。赤城山にて)とある。各地、各時点でさまざまな見聞、記録がとられている。城崎の蜂、鼠、いもり、尾道の鳩に続く一連の動植物との関連である。五編はいずれも、その折り返しの場所の手記、断片ではない。力のこもった完成作である。小品文と云った体でもない。おそらく、当時点の草稿を利用して、発表時に命題、成稿したものであろう。なお、同作品集に併載の『網走まで』(初出は明四三・四『白樺』)も、末尾に「(四十一年八月)」と記す。草稿『小説網走まで』に付記する執筆年月日「(明治四十一年八月十四日)」にひとしい。

各編、それぞれの自己実現、生の充足を描きながらも、果ては死を見る。むしろ、不動の死を前提に、それまでは宮々と励む成長を描く。なかでも、注目されるのは「家守」、「山の木と大鋸」であろう。二編について、「自分が何も書けなかつた時代の、少し厭世的な気分の時、書いたもので、自分は少しも興味を感じてゐない」(『続創作余談』、昭一三・

六『改造』)という。制作に苦渋を滲ませる。残酷な「家守」は、殺そうとして執拗に殺しにかかった物語である。みずから城崎の鼠、いもりが顧みられよう。早朝のひととき、強迫観念にかられた凶行を演じてしまう。病的な発作であろう。一年前には見るに堪えない、その正反対の行為を平然とやってのける。たしかに、志賀の情態は悪化している。「いのち」に「鼠」が忌避され、「いもり」で頓挫した理由である。全編の総集的な「山の木と大鋸」は、樹齡百三十年の大木が虫、小鳥、ナイフ、鉋、鋸の脅威を順序にしのいで成育し、最後に大鋸に会って、従容として伐採に身をまかせる。「それは如何にも淋しかった。然し其淋しさの中に或る安定を得た」と結ぶ。『城の崎にて』の死生観を宿して成稿する。

同じころ、群馬県赤城山の寓居から里見宛に「憂鬱」、「静かな憂鬱」と書き送る。それは「気持ちのいい安固な気分」とも、「それに僕は望みを置いてゐる」(大四・六・二付書簡七八)ともいう。生産性はなかった。創作力は回復しない。無為の「冬眠」をむさぼる消日に過ぎなかった。この、芥川龍之介に告げたことばは作家的餓死、涸渇も含意している。危機は、「自殺しかねない」の翌五年三月十八日に通じて行く。これが第一休止期と称される、情状であった。

長い歳月をかけても、「自殺」の情動は尽きない。効率を下げぬ。豊かな源泉であったのだ。電車禍のショックでは足らず、あの「夢」が結んで増強された、希死の念を設定したゆえんである。終息をみるには、圧倒的な、絶大な、——真実の死にめぐり会って、その目撃者に立つこ

と、この他にあるまい。わが子慧子の急逝（大五・七・三一）である。『和解』五、六章には発病から死まで、いかにまじろがぬ凝視者であったかを語る。以降、志賀は「自殺はしないぞ」を言わない。

5

およそ、旧稿を改題、改稿して大正六年次の発表作にあてる。その営みが劈頭に『城の崎にて』を生む。事情は単純ではない。篋底に年来書き溜めた、大量の、さまざまな未定稿を保有しているからだ。

この短編が、志賀文学復活の第一作に選ばれて完稿されるには、直接に「大正六年四月」十三日、青山墓所の祖父直道、生母銀墓参が機縁となるだろう。が、当時点で自身、この制作に着目し、指定するには旧稿類があまりにも多いようだ。すでに、浮上していたものと、推測する方が実情に合う。未定稿「いのち」と関連資料など念頭にのぼっており、次いで墓参者によって改題、改稿がほどこされて成ったと思われる。

現『城の崎にて』に向かって、再編成のヒントなり、督励なりを得ていたらしい。「いのち」を中心に、前年の日記、「書きかけ」など旧稿は、意識の前庭に押し出されていたのである。作品化発足の契機に、次の二短編披見を立てることができる。高濱虚子『落葉降る下にて』（大五・一『中央公論』）と、いうまでもなく、前掲、里見淳『善心悪心』（大五・七『中央公論』）とである。触発されたに違いない。前者には、構想の本質的な暗示を受けよう。後者に接すると、何よりも、彼我制作の対極的な差異を確認するはずだ。完稿の意志は固まり、ますます促進されよう。

しかし、始動にとどまる。志賀は実証を感得しなければ、執筆に及ばぬからである。『城の崎にて』形成過程のうえで、いってみれば、「いのち」他の執筆を前期とすると、これは中期と呼べよう。中興を経て、十ヶ月後に完稿、発表のときを迎える。

里見作品を読んでいることは、『正誤』（大二三・一二『文章倶楽部』）と里見の『幸福人』（大六・九『中央公論』）とに照らして確かめられる。『善心悪心』は志賀の異常な激怒を買い、長い義絶の発端となる。虚子作品に接したか、どうか、みずから語っていない。しかし、蓋然性に疑いを容れない。

もともと、高濱虚子は、志賀揺籃期をはぐくんだゆかりの作家である。若い文学熱を満たしていた。制作不能期にあたって、ふたたび養われたであろう。

明治三十九年の日記は残っていない。翌四十（一九〇七）年度の記載には、文学熱の昂じたさまが歴然と読みとれる。虚子に鼓吹されたものである。なかに「ホトトギス」（二・一、六付）、「高濱虚子の家へ行って『坊ちゃん』を買ひ」（二・一八付）、「虚子の『風流セン法』を読む」（四・一七付）、「八重子の『佛の座』（注、明四〇・七『中央公論』、野上弥生子）と虚子の『大内旅かん』を読む 共に可」（七・七付）などが散見される。いずれも『ホト、ギス』誌上で、早速読んでいる。当年一月号には『欠び』が掲載されていた。漱石の『坊っちゃん』（明三九・四『ホト、ギス』）購入は、その掲載誌を指すか。その収録作品集『鶉籠』（明四〇・一・一刊 春陽堂）を指すか。落語家の馬生に寄贈するためである

(三・五付)。虚子の自宅(東京市麴町区富士見町四丁目八番地)は『ホト、ギス』発売所を兼ねていた。「高浜虚子の家へ行つて」に関心、親近感はいかにも篤い。

翌年の春(明四一・三・二六〜四・九付)、木下利玄、山内英夫(のちに里見淳)と京都、奈良、吉野などを旅行する。後年の刊行になるが、三人共著『旅中寺の瓦』(昭四六・一・二五刊 中央公論社)の旅である。三人は旅行中、同じノートに日記をつけていた。奈良法隆寺村では、『斑鳥物語』(明四〇・五『ホト、ギス』ゆかりの「大黒屋」に泊っている。この作品に寄せる一同の心酔ぶり、興奮は、虚子宛に寄せ書きを送るにいたって極まる。『愛読書回顧』(昭二二・一『向日葵』)に「高濱虚子の初期の小説も愛読した。情緒的などころが好きだった」といつている。里見との対談『明治の青春』(昭四五・二『海』)でもなつかしく語り合う。多分、『落葉降る下にて』にめぐり会っているだろう。再度、点火されたことは想像にかたくない。『城の崎にて』に合わせると、両作品の題名、内容に共通項はあまりにも顕著だ。

この短編小説<sup>(3)</sup>について、岡庭昇氏は『末期の眼―日本文学における死の発見』(昭五六・四・二五刊 批評社)に「死の発見」系譜の源流に位置づけ、『城の崎にて』に先蹤すると指摘している。主人公「私」は、二十年ほど前、「医者から一度見放された」くらしいの「大病」をして、あと養生に來た「或温泉」をふたたび訪れる。今度は、「鞆に一杯詰め込んで來た仕事」を処理するためである。その「仕事の合間」に、「唯考へ出した事、見聞した事」などを漫然と書き綴ってみるのだ。――温泉場

のまったく変らぬ自然にくらべ、主人公の「二十年間」の推移は「隔世の感」がある。晩秋、樹木の落葉を見、父母や自分の四女の死を回想し、入湯客と交渉し、散歩の足をのぼして「野天の火葬場」に出たり、生まれて一、二ヶ月の孫を火葬に付す「男」に会ったりする。主人公は自身を含めて、「凡てのもの、唄びて行く姿を見やう」という感慨にふける。末尾に近く次のようにいう。

眼の前の山川は其上に芸者屋やおもちや屋や水車小屋や萱原の家や、あの湯壺の中に居た男や、拘引された男や、火葬場や、其火葬場にゐた男や、赤つ茶けた櫟林や、坊主になつた槻や、落葉を降らす榎や、其等のものを静に載せて、凡て時の移り行くのに任してをる。(中略) 山川が静にありの俣を其掌の上に載せて居れば時は唯静に  
其等のもの、亡び行く姿を見せるのみである。

「亡び行く」に任せた自然、人事に対する諦念とも、覚悟ともを吐く。限りなく死に近接して行く。しかし、作品のテーマは、ここに留まっていはいない。転回がある。見落してならぬのは、続く最後の一句だ。

私はたゆまうとする心を振ひ起こして鞆の中の用事を片づけるより外に道はなかつた。  
沈降の底に徹したとき、反転が始つたのである。いわば、死から再生へ、起死回生を物語る。

志賀の留意したのは「或温泉」滞在記、その見聞、随想記を指して、『落葉降る下にて』と題されている点にある。『老子』第十六章に次のことばがある。

夫物芸々、各復帰其根、帰根曰静、是謂復命、復命常曰、知常曰明。

水上勉氏は、「夫れ物は芸々たるも、冬にその根に復帰す。根に帰るを静と曰う。これを命に復すると謂う。命に復するを常と曰い、常を知るを明と曰う」と訓読している。「芸々」は草木が盛んに繁茂し、花の咲くこと、動の状態を意味する。「落葉降る下にて」、すなわち、落葉帰

根の地とは墓地、墓所である。「城の崎にて」に同義である。双方の「——にて」も同じよう。志賀が老荘に親しんでいるのは、「無為自然」を至上とすること、『暗夜行路』前篇に「胡蝶の夢」を引くこと、

また、作中人物「時任謙作・信行・直子」の命名法などによって知れる。贅言するまでもないが、水上氏のエッセイ『私の生れた家落葉帰根』（昭五四・九『小説現代』）は『落葉降る下にて』、『城の崎にて』に関連づけて語ったものではない。氏の生地、「無くなった家の跡」地を回想する。いかに真情を吐露した一編であるかは、標題作に採って随想集『落葉帰根』（昭五四・一一・二〇刊 小沢書店）を編んでいることのでわかる。

いずれにしても、私はやがて死ぬのであった。どこでその日を迎えるかしらぬが、もどる場所は慧能流に考えてこの六十三戸の部落ならいちおう、林佐衛門さんが乞食谷とよんだ谷のとば口がふさわしいかとふと思う。／六祖慧能は、こんなことをいった。／「葉は落ちて根に帰す」

と述べ、つづいて右に引用した『老子』のこゝばを記している。生地をもって墓所にと願う。その空地に「蛇いちごの繁茂」し、「少年時も

藪なかに生えていた一本の樗が五十年のちに、大きく枝を張」っている。墓地、「落葉帰根」の地にて、生命の営みは旺盛だ。そこは決して不毛、死滅の地ではない。

なつかしくも虚子作品に触れて、志賀は篋底の旧稿「いのち」などを想起したに相違ない。それを保有するゆえに、『落葉降る下にて』に注目せざるをえまい。二制作はひきつけ合う。旧稿類は改題、改稿の再編成をそそられるだろう。城崎温泉滞在記にしばらくこんでも差しつかえない。かつて、この地を「城の崎」と記して、いったんは「いのち」に痕跡をとどめた、その意味を悟ることになったろう。その地にて働くモチーフが起死回生であることに、みずから思い当たったであろう。旧稿類の内に潜在していたものが、『落葉降る下にて』に接して顕現する契機をつかむ。階梯を一段のぼったのである。

墓地において、死は生への通路となる。奇矯ではない。死と再生の原理が、もとより、場所を選んで働くわけではない。しかし霊園、寺院の境内墓地を分けず、死者埋葬の地ほど、どこにもまして死を象徴し、痛感させる所はない。近代文学は、この地を参入者の転機の地、蟬脱の地、旧を捨て新しきに就く、死から回生へのモチーフの働く地に設定して描いている。「——家先祖累代之墓」と彫る墓石の前に封建的な「家」の存続を、「——之墓」と個人名を刻んだ墓前に臨んで故人の冥福、鎮魂、追慕を祈る、必ずしも、これらを語ってはいない。枚挙にいとまのない墓場文学、墓地小説などと仮称してみると、この種の作品の実情は概念的なそれではないようだ。死者と墓参者との個人的、精神的、心理的

な手渡し、いのちの継承、再生産が行なわれているようだ。転生の自得を語っている。それは、深層心理学的な尺度をもつ読みこみが必要とするらしい。

迂路にわたるが、作家が墓参場面を、墓地参入をどのように描くか、さらに、いくつか例示してみたい。この領域の代表に、木下尚江の『小説墓場』(明四一・一二・一三刊 発行所昭文堂、発売元杉本書店)がある。冒頭部の「立山の墓地」墓参の場面を抄出してみる。主人公は母を亡くして、心の中が「全く真暗」になり、「混沌」に閉ざされてしまう。

墓場へ来ると、家で考えた時の疑惑不安恐怖憂悶などは、風の吹いたように散されて仕舞ふ墓場へ来て第一に心強く感じるとは、「人は皆な死ぬるもの」と云ふとを極めて明白に悟るとだ。死と云ふとに何の不思議も無い。人は生まれた時から死につ、あるのだ。時計の秒のチク／＼と刻む毎に、人は一歩／＼と死の門に進んで居るのだ。夜が明ければ其れだけ死の谷へ近寄つたのだ。年が変はれば其れだけ死の淵へ押寄せたのだ。人の世に是れ程解り切つた理屈は無い。不思議などには自ら伶俐を誇る人間が、何より明かな此の理屈を忘れ切つて、イザと云ふ時あたふたと泣き騒ぐ。勿論家に居ても此の理屈を思はぬでは無い、机の上でも此の理屈を考えぬでは無いが、只だ何分にも徹底しない。其れが墓場へ来ると、安心して理解される。

墓参者の誰れにもきざす平凡で、敬虔な感懐であろう。やや幼く、それだけに基礎的だ。何ら特異なものはない。死への明察は墓地において

こそ、有効に、普遍的に發揮されるに相違ない。死は他所ならぬ「墓場へ来ると、安心して理解される」。抱いていた「疑惑不安恐怖憂悶」など一掃されて、死の受容のみ素直に、容易に可能となる。

なぜに、「安心して」なのか、作家は何もいわぬ。この墓参場面を巻頭に据えることで、回答としているらしい。以下に、大部な作品世界を展開するからである。従来を生とは異なる生、新たな生を拓く。作者は自身の社会主義運動家、実践者から離脱して思索家、内省の人に転換する、その推移を回想している。実際に、木下の前半生は新聞言論人、弁護士、演説家として廃娼運動、普選運動、足尾鋇毒事件、日露非戦論を鼓吹し、挺身して来た。政治を志して衆議院選に立候補し、惨敗を喫したり、罰金刑を受けたり、投獄も経験している。こうした運動家実践行動から手を引いた自身を省みて物語る。二年前の事実、明治三十九年五月七日、母親くみ六十八歳の死と墓参にもとづく。この墓参がきっかけとなって、木下の転身を揺ぎないものにしたという、確実な自得があつて設定された冒頭部であろう。墓参場面はひとしく転機、新生をはらんでいる。『小説墓場』に限らない。

深沢七郎『楢山節考』(昭三一・一一『中央公論』)、野坂昭如『火垂るの墓』(昭四二・一〇『オール読物』)、古山高麗雄『墓地で』(昭四四・七『季刊芸術』夏 第三巻三号)などの執筆、発表は外面的な偶然とはいい切れぬ。各種の経歴を持つ各作家の、転身を果たすと自得された制作に違いないのだ。

今度は逆に、あえて無関係な別個の作品終末部を挙げる。尾崎一雄の

短編『美しい墓地からの眺め』（昭三三・六『群像』）は次のように結ばれる。主人公「緒方」は胃潰瘍ほかの宿痾に悩まされ、「不治といふ自覚」に達している。先きごろ、同二十三年四月五日に亡母タイ（明一〇・三・五）昭三三・四・五 享年七十一歳）の一年霊祭をすませた後、小康を見はからって、父祖累代の墓所を詣でる。帰途につこうとして「ゆつくり墓域を出ると、南のかた、相模灘に目」を放ちやる。視線が、「初めて見るもの」に変わっているのだ。

相変らずの眺めだ、と思ふ。——俺はこの頃、何か墓場へもぐる準備ばかりしてゐるやうだが、実は、さうではないのだ、と思ふ。すべては「生」のためだ。人間のやることに、「死」のためといふことはない。人間は「死」なんか知つたためしがない。「死」を体験する主体、我はずでに無いからだ。人間は「生」のためには、自殺さへする。——緒方は、目の前の美しい海や山のたたずまひを、初めて見るもののやうに、しげしげと眺め入るのだった。（二十三年四月）

末尾の付記は、作品の執筆時である。後年の『墓地の変な木』（昭五二・二『文芸春秋』）中に次の回想がある。「昭和十九年秋、東京上野桜木町の借家」で倒れて以来、積年の重患にあえぎ、巧みに馴致しながらも絶望している渦中にある。「昭和二十二、三年の頃は顧みると私の病状の最も香ばしからぬ時期で、いつまた葬式があるか判らぬ、と思はれた」。墓参は自宅から「三分ほどの近さだが、それを倍ほどかけ」て行なう。作品は「割合楽に書くことができた」という。右は、その時の自

得である。

なるほど、ここにはひとつの払拭があり、蟬脱を述べているようだ。語調はきびしい。墓域から帰りがけの主人公は、突然に心を改めて悔悟、翻意してしまうように見える。それは違ふ。「墓場へもぐる準備ばかりしてゐるやうだが、実は、さうではないのだ、と思ふ。すべては『生』のためだ」に、死からの反転、逆行はない。生と死とは相対化されていない。死と生とが、その順序に並んでいる。墓場は死から生へたどる直通路だ。「墓場へもぐる準備」、——衰退していく旧家、その三十九代目の病弱者が両親を送り、弟妹三人を送り、わが子を先立たせ、神仏混淆の古い墓所に惹かれる。次の亡母五年祭までに欠けるのは、叔父叔母（亡母の弟妹）を抜いて自分だと心支度もしている。こうした死への親近、傾斜の直線上に隣接して、生の存在を直感するのだ。

枢機は「実は」にあるだろう。一般的な真理を持ち出して、塗布したという気息ではない。埋没していたもの、隠蔽されたものの発見ともいえる。しかし、掘りおこしたわけではない。死生の省察にもよらぬ。やはり一種の訪れ、墓場の啓示を受けたのである。自然の、「死」を知らぬ生命は「生」にしか目覚めぬようだ。その来信をえたらしい。発信が内心の深奥から、無意識からのメッセージであることを仄めかしている。まだ、その機微を具体的にはつかんでいない。墓所からの景観は『墓地の手入れ』（昭二九・二『文学界』）にも詳しい。

その後、尾崎は随所で、ユーモラスに、透明感をたたえて、年次ぎざみの延命計画と、そのクリアと、更新とを語るようになる。自己督励の

激しさはない。鼓舞などしてはいない。ただ、死に甘えず、生に傲らず、日々を誠実に営み、生命をいとおしむ。その営みの内側に作用するのは、尾崎家墓所詣でに感得した、死と再生のモチーフであろう。志賀『城の崎にて』の継承者の生であろうか。

死と再生、その機微を小説化し、具象的に物語ることは不可能なのか。たとえば、島崎藤村の『春』（明四一・四・七・八・一九『東京朝日新聞』五面に一三五回連載）の第「四十一」章（明四一・五・一七付紙上掲載分。現「四十一・四十二」章にわたる）を瞥見するとき、その端緒に触れられよう。単行本『緑蔭叢書第貳篇 春』（明四一・一〇・一八刊 発売元上田屋）に収める際、全「百三十二」章に構成を変更し、字句の修正をほどこす。

主人公の「岸本捨吉」が入水自殺を図って、からくも、「浪打際で踏み止」まる場面である。ひと筋に貫く「浜道」をくだり、途中の「墓地」を通って行く。花を供えた「新しい墳」を見たり、供えられた「水」を飲んだり、また、倒れている「古い石塔」に腰かけて動かない。主人公は、死の自己象徴に圍繞されている。しかも、死後の埋葬された自身を、新旧の墓石のうえに、長期にわたって眺め渡してしまっただらしい。生きながらの、この死者は決意を新たにして立ち上がる。自身の「墳墓」たる、夕暮れの海に臨む。新聞初出の「四十一」章の終りの部分は、

蒼茫として彼の眼前に展けた光景は、永遠偉大な自然の絵画でもなければ、神秘的な力の籠った音楽でも無い。海はたゞ彼の墳墓である

——冷い、無意味な墳墓である。不幸な旅人は、今、自分で自分の希望、自分の恋、自分の若い生命を葬らうとして、その墳墓の方へ歩いて行くのである。到頭、彼はその墳墓の前に面と向って立つた。暗い波は可怖しい勢で彼の方へ押寄せて来た。『此世の中には未だ自分の知らないのが沢山ある——今こゝで死んでもツマラない』斯う岸本は思ひ直した。彼は浪打際で踏み止まって、そこからもう一度人里の方へ引返した。

一語一語ゆっくり、懇切に記している。作家の苦心し、工夫の凝らした叙述に違いない。何しろ、死を覚悟して翻意するという、微妙な場面だからである。用意があらう。

主人公は、墓場の最奥部に窮まっていたよう。いわば、藤村の語る「城の崎（先）」にある。そこ「にて」働く起死回生のモチーフは、「眼前に展けた光景」内にしかあるまい。岸本の意識は明晰で、耳目もうつろではない。「永遠偉大な自然の」、「神秘的な力の籠った」と形容した「絵画」と「音楽」を提出する。冗語、贅言ではない。視覚、聴覚を占めたすべてである。二要素は、藤村の創造であるのか。明治二一六（一八九三）年十一月、二十二歳で海中投身を覚悟したという体験にもとづいて、それを感得したものか。このように修飾された二要素は、いうまでもなく、死よりも生を、再生を寓する。至当だろう。しかし、表現上、それは「——でもなければ、——でも無い」と。屈折する。かえって「海はたゞ彼の墳墓である——冷い、無意味な墳墓である」と、強調して引き継ぐ。入水をとどまった以上は、うち消しも、拒んでも、「絵画」と



「音楽」とは、それぞれが冠した靈妙な形容内容を發揮し、浸透したものである。おのずから、瀕死の肉体に、生命力を吹きこんでしまったしななければならぬ。自殺の意志をしのぎ、うち勝ち、裏切ったのである。一種の靈肉の相克をみせたらしい。

「此世の中には未だ自分の知らないとが沢山ある——今こゝで死んでもツマラナイ」という。実情は、思弁的理由を立てて、「踏み止まつたのではない。むしろ、これは再生後の生を証す。主人公の現実復帰である。再生と再生後とはレベルが違う。「思ひ直した」と「踏み止まつた」とは整合、一致しない。「暗い波は可怖しい勢で彼の方へ押寄せて来た」の段階で、いのちが注入されていたのだ。再生は完了する。暗く、荒い波濤の往返に直面して、恐怖心をつのらせて投身をためらったのではない。芸術性、裝飾性をはぎ取った、象徴的な「絵画」と「音楽」との自然の原理が作用して、生命の授受が行なわれていたからである。従って、単行本刊行に際して、ふたつに分け、前後、「四十一」章末尾と「四十二」章冒頭に組み込んだのである。作家の意図を補強した処置であろう。

藤村は墓場における、死から再生へのプロセスの小説化を試みたらしい。「絵画」と「音楽」とを挙げて、その効験を描く。生命の秘密に迫る。先例の有無は、寡聞にして知らない。希少な事例を開いたものではあろう。それにしても、叙述は非論理的で、不明解である。幾分か意識、現実と何かとのせめぎ合いを説く。再生が、意識や現実のレベルを超えたところに働くらしいと気づいて、その不可解な場に踏み入ったよ

うだ。それが文章の乱れ、あいまいさをきたしたのであろう。夢や無意識に関心、理解の浅い作家の限界である。

といっても、やはり、再生にかかわってふたつを必須の条件に示した、藤村の指摘は卓見であろう。二要素が「眼にうるさいばかりでなく」、耳にも「八釜しくて堪らない」ほどに動的、劇的な形象化、音律化され、しかも、それが「夢」によって得られたとき、当人の死から再生への効力はより増大しよう。われわれは、この種の夢見を志賀『暗夜行路』後篇第四の二十（昭二・四『改造』、最終回掲載部「二十」）中に知っている。すでに、本考察「三」章に掲げた。止宿する、伯耆の「天台の靈場」大山の「不二門院（注、現行「蓮淨院」<sup>4</sup>）の離れ」で重態に陥った主人公のもとに訪れた夢である。「二本の足」が遠近しながら乱舞、震動する。時任謙作は死地を脱して蘇生し、急ぎ入山した妻「直子」と再会できる。これに対照することは、牽強付会ではあるまい。

語義のうえで死と生、再生とは画然と分れた反対語である。死から再生への道程は、生が限りなく死に隣接したときに、そこで反転して、ふたたび生に立ち戻る方向をとるかのようと思われる。墓場は生命の折り返し点であり、墓参はUターンの行為となるのか。いや、作品に照らすと、どうも順路は一直線であるらしい。墓参者、墓地参入者たちは、墓場を通りぬける直行者であるらしい。通過の間に、死は生に変転してしまふようだ。死の極地で生の表徴にめぐり会い、いのちを吹きこまれて再生を遂げる。意識、現実のレベルでの操作ではない。

無意識の深層にうごめく死と再生のモチーフとは、仮説的な概念であ

る。その小説化は「夢」にたよるしかない。なぜなら、無意識からの信号を意識に、覚醒時の現実にもっとも有効に伝えるのは夢ならではかなわぬ。夢の作家の知悉するところである。墓場の死から再生へというテーマは『城の崎にて』に、その仮構化が可能だろう。要求してよい。

次いで、里見の『善心悪心』に接することになる。一連の自伝的な「昌造もの」の秀作である。またしても、主人公の女性関係や交友を語る。とくに、「佐々」との交渉裡に働く角遂、暗闇、愛憎をあげすけに告白して、志賀「蟬脱」を図る。独特の善心、悪心を全編いたるところに鑲めて挑発的、露悪的である。容赦しない。すでに、『君と私と』の時とは違い、事実上、里見の「蟬脱」は完了してしよう。しかも、反撃力を失くした、制作不能期に乗じた挙といった気味もなくなはない。志賀には、卑劣な里見に「汝けがらはしき者よ」の極言を書き送るしか、報いる術はない。

作品の最後尾三章に、電車禍事件のてんまつを描く。遭難の折り、終始、同行し介護に努めたのは里見である。芝浦海岸、台場三島で催された納涼祭見物行に始って、その帰途の電車接触による負傷、病院搬送、入院、快方に向かうまでを詳述する。この部分とて、志賀の激怒を充分に買うものである。翌年四月完稿の『城の崎にて』も、里見に宛てた制作ということが出来る。いささか時宜をはずれた、相互の応酬である。

わけても、三章中の第一の前半部に、精妙な描写力を傾ける。ある異空間を造形してしよう。芝浦埋立地から「鉄道線路の土手」に登り、田町・浜松町駅間の「芝橋鉄橋」際の遭難現場におよぶ、不可思議な「他

界」徘徊を物語る。それは畏友の奇禍に立ち会った、唯一の証言、資料というような体では無い。才氣にまかせ、知巧の言をつづったものではない。事件以来、存分に歳月を費やし、この偶発事に問いかけを尽して、志賀が不測の事故を招くに到った経路を明視しえて、作品化したものである。里見にも痛切なショックであったのだ。立ち直って執筆できたのである。三年を要したともいえる。発表誌面に、大正「——五年六月——」と執筆年月を付記している。

この目撃者も、実は、目撃者の方こそ死の深淵をのぞみ見て、語ることのできる恐怖の体験者であった。たしかに、電車禍に遭う危険は里見、志賀に平等であつたらう。死との遭遇は、見ることによってのみ可能だ。志賀は見えない。悪夢のような死地をくぐり抜けてはいない。「電車に跳飛ばされ」たという（『中外商業新報』）軽傷者は、「此怪我は fatal な出来事」（大正・八・一九付）かどうかを自身の問題としながら、死の認識者にとどまる。それも、あの「夢」見の後であり、蜂、鼠、いもりの死目撃を重ねて、「白い鳩」囁目の後に、電車禍と結びついたそれとなる。ついに、生々しい現実の目撃には欠格者だ。志賀には、『善心悪心』最後尾三章が、他ならぬ自分の死目撃者の優位を誇示しているかのように、映ったかも知れない。客観的には、優位は動かぬ。代償も払っている。次の一節は、遭難、負傷の聞き書きである「日記」や「いのち」の記述など比すべくもない。

それでも彼等は出来るだけ線路から離れて、土手の草を踏むくらの端を歩いてゐた。下り列車は彼等の歩いてゐる側からは一番向ふ

のはづれの線路の上を轟々と凄じい響をた、て走つて行く——昌造のつひ目の前を歩いてゐた浴衣がけの佐々の薄ら白い後姿がパッと消えてなくなつた。途端に昌造は非常な音響と、吹きよるめかされる程の空氣の攪乱に会つた。熱く感じるほどの、焦臭い風が裾をあほる。直ぐ頭の上を四角な明るいものがチカ／＼チカツと飛び過ぎる。次の瞬間に昌造は目の前に山の手電車の岡のやうに大きな後姿と赤いランプの光を見る。恐らく三秒よりも短い間にこれだけのことを感覺する一方では、佐々が鞆のやうに五六間さきへケシ飛んで行く瞬間の姿をも見た。そしてその次の瞬間には、切腹した人のやうにうッぷしてゐる佐々を、後から抱き起してゐる己を感じた。額から鼻柱の横へ流れてゐる血を見る。目はあいてゐる——

遭難の瞬間が、ヴィヴィッドに構築されている。高い臨場感が迫ってくる。「下り列車」の通過を背景に、交叉して「佐々の薄ら白い後姿」が、一瞬消え去る。そして、「鞆のやうに五六間さきへケシ飛んで行く」映像はほとんどマジックに等しい。低い視点も、遠近感もしっかりしている。「いのち」の、「電車に背後から二間半程ハネ飛ばされた」に對比されよう。どんなに「線路から離れ、前後一列に歩いて行こうと、標的は決っていたのだ。音もなく追尾して来たものは、突如正体を現わして手前の昌造を無視して、先行する佐々を「ケシ飛」ばし「パッと消」したのである。轟音、熱風、臭気、スピード、震動。「四角な明るいもの」は、「大きな後姿と赤いランプの光」に変わって遠ざかる。佐々、昌造に一顧だにしない。句々に配した用語に「悪心」は宿っている。

まず、「切腹した人のやうにうッぷしている佐々」を道路に担ぎ降ろすことであつた。里見の比喩には、しばらく目を疑う。「いのち」に、「石垣の上で突伏してゐた自分をカスカに覚えてゐる」という。通行人に呼びかけ、助力を借りなければならぬ。土手と道路との高低差は「三丈ほど」もあるという。「二六新報」の記事には「二間余」とあつた。大量の出血に驚き、その処置に腐心する。昌造の危惧は「死ぬかも知れない」、「助からない」である。東京病院搬入までに払つた焦燥、苦慮も余すところない。実状は軽傷であつた。緩みのない表皮、薄い脂肪層に包まれた頭部の、線路露床に敷かれた碎石に打ちつけた裂傷は軽度であつた。「頭のきづは一寸四分、骨まで達してゐたといふ」（大二・八・一八付）、「切口は六分程だつたが、それがザクロのやうに口を開いて、下に骨が見えてゐたといふ」（いのち）。随所に、里見は誇張をどこしにたらしい。医療に無知な介助者が慌てふためき、度を失つた救急時の、誰れしも免れがたい、ふつうの誇大視であろうか。この意味でも、リアリティ豊かな仮構ではある。その上に、診察、施術後のどんでん返しに奏効する。「——佐々も助かつた！／＼かう思ふと昌造は何かもの足りなかつた」と。披読した、当の志賀は心中おさまらぬ。当然だ。

その夜、昌造と佐々とは、芝浦埋立地の海岸に「立つ」。納涼祭のために開放された、台場のひとつへ渡ってみようと思つたのである。旧暦十五夜の月が、「その下を薄雲が流れる度に息をつくやうに明るくなつたり暗くなつたり」する。「耳朶を鳴らしてポー／＼と吹く」海風も、「締りのない、生温く湿」って涼味はない。潮の香にも「腐つた魚の

匂」が混じり、「湯のやうになつた海の上へ白い腹を出して浮んだ死魚の体からでも匂つて来るやうな心持ち」にさせる。若者たちの水泳すら、「妙に危つかしく思はれるやうな晩」である。凶変をはらんでいよう。

この不気味な「他界」を、ふたりはさ迷う。行く方をなくしている。早くも、台場へ渡るはしけの発着場を探す気はない。ぬいだ下駄のうえに腰をおろして、「暗い水平線」に目をやるだけだ。帰りがけに「素人相撲」の掛小屋をのぞいたり、「安譜請やすずみの小料理屋や小待合のゴチャ／＼と建て込むだ一廓へ例の好奇心から折れ込む」でみたりもする。道は「鉄道線路の土手」に阻まれて行き止まりだ。にも拘らず、「あと戻りをするのが業腹なので」構わずよじ登り、線路わきを歩いて新橋駅の方に向かう。近道という利便を考えたわけではない。危険への配慮も働かぬ。ふたりは「天心に昇つて青く澄」む月の下、迷宮内を岐路に当っては誘われる。徐々に、そこへ引き寄せられるらしい。なるほど、気味悪い「他界」である。

やがて、結語に達する地点だ。「前の方から大地を震動させて下り列車」が来るのを認めて、佐々がいう。「大丈夫だ。こいつは気違ひぢやアないから」といったとき、遭難者は決まる。ひそかに追走して来た電車が、佐々を選びとつたのである。路上、どのようにも逸走する自動車を指して、「気違ひ電車」と呼んだ「ケンノン性」な友人のことばを使ったのである。たしかに、佐々は軌道はずれぬ、「気違ひぢやアない」山の手電車で「触れた」のだ。痛烈である。後方不注意とも、偶然とも、不運とも、奇禍ともいわぬ。後悔の念もわかない。佐々の遭難は、

当然の成り行きであつた。生死のかかる危急を描いて、機知は鋭く、ユーモアと揶揄、揚げ足取りを弄する。——旧稿「いのち」には、「自分の不慮の禍に心から驚いて友が心を痛めてゐた事」と信じ、書きつけていた。もとより実状である。『善心悪心』には、このような衷情を語らない。里見の資質であり、作風であり、当制作のテーマによるからである。

作中、「大丈夫だ。こいつは気違ひぢやアないから」の話者は誰れか。昌造とも佐々とも明記しない。里見が口をつぐみ、慎しんだのである。放置できない。いずれかに特定されねばならぬ。キーワードだ。佐々の放つたことばと判読しなければ、佐々本人の遭難を導き出せない。珍事は一言のすきを、おごりを衝き、惹起される。佐々が招いたものだ。「危ないよ」は昌造のことばである。もし、警告をいれていけば、自己弁護、責任回避をひそませる。佐々の自業自得とまでは言いえなかつた。同様に、その直前の「なに、線路についてもうちつと行つてみよう。大抵下りられるよ」も、話者を明らかにしない。しかし、これは事故の遠因であっても、決定的な起因ではない。昌造、佐々のいずれともしない、気軽な会話であつた。

里見はみずからは免れ、志賀の蒙つた電車禍に、必然的な筋道をつけようとする。不可避といわんばかりだ。志賀遭難に払った、真剣な問ひかけの奈辺にあるか明らかである。誠実な解明を試みたのである。「不慮の禍」と自得している志賀から、逆に巧言、狡知と疑われても仕方あるまい。

『善心悪心』最後部三章に接して、未定稿「いのち」を中心とする旧稿（現存せず）、日記などが胎動することはあろう。「いのち」の（上・中）は大略排除され、（下）をもって増補してまとめ上げられる。しかし、それは点火にとどまる。「城の崎・にて」の物語に再構築されるのは、翌年春、創意の回復を待たねばならない。題名通り、いのちをテーマとするという意味では、「いのち」本来の基調は動かぬ。後続して完稿する『城の崎にて』は、『善心悪心』三章に對置して制作できよう。重複部がないわけではない。結果的に、里見は遭難事件を、志賀は（城の崎）を語る。各自の領分を守った形をとる。従って、『城の崎にて』中に里見が捨象される。作中、遭難時に同行者があったとは思いつらぬ。搬送先の病院や手配の指示を受けた人は誰れか。「側にゐた友」とは誰か。里見に特定することは不可能だ。おのずから、介護者に対して謝辞はない。『善心悪心』最後部三章は、『城の崎にて』中に不快な遺恨をどめてしまう。

この時、志賀は黙視、笑殺などできない。激情に駆られる。みずから制御のきかぬ怒りは、一体、何にを意味するか。決して「モデルの不服」ではない。駁文を書く余裕はない。芸術観、人間観の相違もあずからぬ。もっとも直截なものだ。『君と私と』披読の折りとは違う、過敏な志賀である。たしかに、里見『君と私と』以来の、もっと遡って、『大津順吉』制作以来の双方不一致、暗闘の累積、継承した、その頂点に立つ。実情は決裂である。ほとんど、常軌を逸した狂態は深い内因に発した暴力的な反応である。

前掲、『正誤』や里見『幸福人』、『春の水ぬるむが如くに——この小品を中戸川吉二君に贈る——』（大二三・四『隨筆』）によって見ると、激怒の特徴は直線的な攻撃性、破壊性の発揮にある。文中、「或る部分」や「私に対する見方」に腹を立てたというが、その説明はない。当時、これらの分析的な理由を要さぬ。直情のとめどない流出、放出である。他方、里見にとっては、寝耳に水の暴言であった。自作がまさか、激怒を買うなど露思い及ばぬ。大正五（一九一六）年六月九日付『読売新聞』七面「よみうり抄」欄に、『善心悪心』執筆と「今秋我孫子へ移転の予定」と報じられていることで、それは知れる。その最後部三章も、作家のうかがい知れぬところで、逆鱗にふれていたのである。罵声を浴びせられ、一方的に義絶されてしまう。

電車接触の事故は、共有の作家的好餌であった。かねて、里見による小説化を予想はしていたであろう。自身のものは中絶して久しい。里見の文藻を凝らした名場面は、あの電車禍の現実を想起させたのである。眼前に、まざまざと現出したのだ。当事者が目撃者と化す。詭計にはめた里見に筆誅を加えたわけではない。今度こそ、志賀は恐怖心を覚えて震える。三年前の事故に端を発して、短い高揚期の燃焼を経て、反動的に萎縮し、「自殺はしないぞ」、「自殺しかねない」の情動をかかえているからである。ひたすらな回復、鎮静を待っている。遭難の再現は、脆弱な内奥の不可触の部位を剔抉し、存分に蹂躪、侵犯してしまったのである。志賀は傷つき、引き裂かれる。里見の考え及ばぬ深層であった。激怒は「自殺しないぞ」の暴発に違いない。そして、さらに沈降する。

同じ月の末、七月三十一日に志賀は長女慧子の急逝に遭う。前夜の就寝直前に発病し、この「朝七時四十分」死亡という。一夜の、不測の死であった。誕生して五十五日目であった。真実の死との遭遇である。

語弊を犯してあえていえば、幸いにも、我が子の死が父親を救ったのである。生が救済に作用するだけではない。初めて、志賀は死の実体を見る。その前に全身をさらして見つめている。「和解」に、発病から死まで徹宵看護して瞬時もその場を離れぬ、凝視者であったかを詳述している。他事をいっさい入れぬ、忘我の時間であった。慧子の死に傾注する。小林秀雄の評した「決して見ようとはしないで見てゐる眼」とは、表面の意識層にとどまらず、無意識の深層に達しているとの指摘であるらしい。死の完全享受が、目視を通じて無意識に直到しないはずはない。そこで、真実の死は在来の「へえせ死」を駆逐し、更新しよう。死の絶対性、不時性が仮想の死を、不確かな虚像の情動を一掃するのである。そのメカニズムは知らない。事実のうえで奇異ではあるまい。きわめて常套だろう。以降に、志賀の「自殺はしないぞ」、「自殺しかねない」を見せぬ。

自殺念慮は払拭される。しかし、わが子を失くした非嘆が残る。強行した青山埋葬をめぐって、父子不和を新たにす。里見への痛憤は続く。

終夜、慧子の看病に尽力した、隣家の柳宗悦、兼子夫妻、その柳は八月十日に「朝鮮支那の旅」に発つ。志賀の寂寥感は濃い。折りから、武者小路に隣村の所有地（千葉県東葛飾郡富勢村根戸船戸一〇九〇、現、我孫子市船戸二一二）に転地療養を勧めている。その十二日に右肺結核との

診断、実は誤診と判明するが、を受けたからである。武者小路『新らしき家』（大五・一〇『新潮』）に詳しい。また、日ごろ、我孫子住まいを望んでいたからである。一年前に、「志賀が我孫子の柳の家の近くに家を持つた。我孫子は段々賑やかになつてゆく、その内武者もそこに住む事になるだらう」（『編輯室にて』、大四・八『白樺』）と報じ、武者小路自身も、「僕は我孫子に小さい書齋を建てられたら建て、月の始めに一週間許り行つてゐやうかと思つてゐる。しかし何時の話かまだわからない」（『編輯室にて』、大四・九『白樺』）ともらしていた。志賀の申し出を喜び、素懐は後日かなう。

武者小路宅の設計から建築、落成、入居まで先きは遠い。待てぬらしい。志賀夫妻は信州山ノ内温泉郷の上林に、妻子連れで滞在し制作中の画家九里四郎のもとに駆けつける。八月二十日に青山墓参をすませ、そのまま旅に出してしまう。出産後の「七十五日」に合わせ、忌日も「三日を七日」と数えて、慧子四十九日忌としたのである。四十日間も、我孫子の自宅を空けてしまう。行程は「ノート13」冒頭の「旅日記（大正五年）」に記録されてある。

あわただしい旅立ちには、「赤児の死によつて受けた心の打撃」を癒そうとしたためではある。しかし、夜行列車では「其汽車が衝突しさうな気」に悩まされる。上林温泉に着けば、「其晩から」頻発する地震、鳴動に脅かされる。堪えられない。八月二十四日、九里一家を巻きこんで、加賀の山中温泉に逃避する。

一行が上林温泉を去った後になるが、大正五年八月三十日付『信濃毎

日新聞』一面に、「西沢所長の地震調査 中野署長の要求」の見出しで次のようにある。

本月二十一日以来下高井郡平穩村（注、現下高井郡山ノ内町大字名）

方面には一時間一回位の割合にて地震続発し今尚歇まず性質は微弱なりと雖も其中稍強きもの一日中に二三回に及び人々不安の念に堪はず震源地は平穩村より東北約八里なる笠法師岳（注、山ノ内町の東部に連なる山、標高一九一九メートル。ほかに烏帽子岳二三三〇、裏岩菅山二三三七、岩菅山二九五メートルなど）ならんとの説なり同山は曾て硫黄を噴出せる白根山系に属するものにして其東麓より起るものらしきも果して然るや否や人心をして安堵せしむるため至急技術員派遣実施の調査ありたしと昨二十九日中野警察署長より本県へ技師の派遣を要求し来れり本県には西沢測候所長に出張を命じたり氏は病氣中なるが三十一日には出張し得べしと云ふ

なお関連記事に、八月二十五日付同紙五面に「地震頻々、此俟終熄か」の見出しで地域別に報じたものがある。なかに「山之内付近 下高井郡平穩村各温泉地は二十三日午後七時二十分頃より同四十八分迄の間に十五回の震動ありたり」という。被害、罹災の記載はない。『北国新聞』八、九月中に長野県下の地震報道は見当たらず。

山中温泉に滞在中（大五・八・二六〜九・一八）に出した、九月七日付の三浦直介、園池公致宛書簡（九三）がある。文中に、「城の崎」の記述を見る。「此所は城の崎に一寸似た所だ。城の崎程マトマツてゐないが溪流が中々い、」という。対比して、曾遊の城崎温泉を思い出したも

のではあろう。が、この時点、城崎ならぬ「城の崎」二ヶは、少し気になる。「いのち」など旧稿がクロスアップして、「城の崎」物語に向かつて動いているかも知れない。

志賀夫妻は九里一家三人と別れて、福井、永平寺、敦賀を経て京都市なじみの土地である。「ノート13」に、「廿三日弁訪ねて来る」がある。宿泊先の「京都東三本木信楽」で旧交を温める。「日刺し」の弁とは、「大正三年十月」の<sup>(5)</sup>「寓居」(大10・1「新潮」)以来の再会であろうか。さらに奈良、鎌倉をめぐる、我孫子の自宅に帰着したのは九月二十九日である。地震をのがれ、各地に発生するコレラを避けた、長期の周遊旅行であった。武者小路の新居はまだ建設中だ。九月九日に着工している。

(未完)

(1) 志賀日記によれば、東京病院を退院(大2・八・27付)すると、翌日から同院と順天堂病院との通院を日課にする。それぞれ九月十三日、十月六日までである。その間、在阪の九里四郎が上京(九・25付)して盛んに往來し、十月四日にはその帰阪を新橋駅に見送る。順天堂の性病治療は十一日に終了。直ちに、翌日付の「新橋の停車場」は大阪行き切符購入。十三日付「午前神田橋外の瓦斯屋(注、瓦斯会社があった)のチンレッツ場へ行きガーストープを買ふ、二十三円だった。望むでゐた品に近かいものだった。かねて目をつけていた、強弱の段階調整のきく尾道寓居の必需品であった。「かへり東京病院へよる、別に異常なしといふ」は確認である。実際、翌十

四日の午後八時新橋発急行神戸行で西下してしまう。順天堂の完治を待って、途中、九里に再会する尾道行をはかったのである。「瓦斯ストーヴ」と「瓦斯のカンテキ」は『兒を盗む話』、『暗夜行路』前篇第二の三（初出「十五」、大一〇・四『改造』）に描かれる。着火音の大きい、「消すと（注、部屋が）直ぐ冷えて了ふ」不便なものであった。購入した新製品は使用にいたらなかったらしい。

(2) 大正二年八月一日から三十一日まで第一、三、六台場を会場とした納涼祭。東京毎夕新聞社の主催。当期の『東京毎夕新聞』紙上に盛況ぶりを詳報している。なお、大正二年八月二日付『時事新報』七面に「品川台場の納涼地」の見出しで、「東京毎夕新聞社にては一般市民納涼地として品川台場を借受け一日より九月下旬迄無料入場せしめ台場内には飲食店及び余興等の設備もなしたるよし」という。八月三十一日をもって、台場の諸設備を撤回、芝浦渡船所も閉鎖するが、台場三島の公開は九月中旬まで（大ニ・九・一付『東京毎夕新聞』三三三）という。

(3) 高浜虚子『俳句の五十年』（昭一七・二二・二五刊 中央公論社）中の『柿一つ』と『落葉降る下にて』と題する文章に、「『落葉降る下にて』といふものを書きましたが、これは形は写生文の如く見えますけれども、全く架空の小説であります。」とある。

(4) 『志賀直哉全集』第八卷（昭一二・一〇・一六刊 改造社）に収録するときに改める。

(5) 『寓居』の最初の収録作品集『寿々』（大一一・四・二〇刊 改造社）の作品末尾の付記による。